

消化管の病理と生検診断

中村 恭一，大倉 康男，斉藤 澄 著

消化器内視鏡医にとって最良の病理解説書

久留米大学教授・消化器内科学

鶴 田 修

今から約 25 年前，故白壁彦夫教授が司会をされていた研究会に久留米大学から IIc 型早期大腸癌症例を提示したことがあった。外科手術症例で標本の張り付け方が悪く，X 線，内視鏡などの画像とマクロの対応が困難となってしまう，白壁教授からかなり強烈なお叱りを受けて立ち往生している時に，当時筑波大学教授であった本書著者の中村恭一先生から「病理学的には頭の中で切除標本を伸ばせば，マクロと画像そして病理組織像の対応は可能である」というお助けの言葉をいただき，その場をなんとか切り抜けることができた。先生のお優しさには今でも大変に感謝している。中村先生は臨床の疑問点を理解され，真摯に答えようとされる。先生の下で研修した多くの医師が日本各地で消化管画像診断学のリーダーになっていることにもの納得がいく次第である。

さて，共著者である杏林大学・大

倉教授から「本書は 1980 年に中村先生と故喜納勇教授の共著で出版された『消化管の病理と生検組織診断』を時代に合わせて改訂し，足りない部分を補充したものだ」というお話を伺っていたが，実際読ませていただくと前書と比べてその内容の充実ぶりに驚かされた。全消化管（食道，胃，十二指腸・小腸・虫垂，大腸，肛門管）の解剖，形成異常，炎症性疾患，非腫瘍性疾患，腫瘍性疾患について，カラーのマクロ写真，切除標本・生検標本の病理組織写真，内視鏡写真，図表を駆使して漏れなく記載・解説されており，非常にわかりやすく，特に腫瘍の項などは中村先生の癌発生とその組織像・診断に関する哲学までも十分に感じることのできる内容となっている。

消化管の内視鏡診断を行うには，正常消化管組織像，疾患の概念，肉眼像，病理組織像を理解・記憶することは，少々苦痛ではあるが必須で

ある。また，最初は苦痛であるが，少しの努力により疾患の理解，内視鏡所見の読影力がつきだすと，苦痛は次第に快感へと変わり，それに伴いどんどんと実力も向上していくものである。これまでの消化器内視鏡医のための病理解説書は簡単すぎたり，難しすぎたりで，内視鏡医にとっては「帯に短したすきに長し」と感じるものが多かったが，本書は内視鏡医に必要と思われる項目について「痒いところまで手の届く」内容に仕上がっており，苦痛を最も少なくして多くの知識を系統的に理解できる最高の 1 冊である。

ここに消化器内視鏡医にとって最良の病理解説書が出版された。消化器内視鏡専門医をめざす医師にとっては必須の 1 冊である。

●B5 頁 464 2010 年 定価 15,750 円
(本体 15,000 円 + 税 5%)

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)